

平成24年度地域資源を活用した新商品開発事業報告（伊賀焼）

榊谷幹雄*, 伊藤 隆**, 西川 孝*, 新島聖治**, 林 大貴*

Project Report of Promotion Program on Development of Iga Wear with Regional Resources

Mikio SAKAKIYA*, Takashi ITO*, Takashi NISHIKAWA*, Seiji NIJIMA*
and Daiki HAYASHI*

1. はじめに

全国の陶磁器産地において、長引く不況や安価な海外製品の輸入により生産量が減少するなか、三重県の伝統的な地域資源である伊賀焼は、その独自性と高品質により海外製品との差別化が可能で影響を受けにくいと言われてきたが、現実には厳しい状況で国内他陶磁器産地との競争も年々激しくなっている。

そこで、本事業では、これらの競争に対抗するため、産業としての伊賀焼を支援し、様々な施策を講じている多様な主体（関係機関）の連携を深めるための連絡会議を開催した。

また、共同研究による新商品開発を推進するため、窯業研究室保有の研究成果や試作品を紹介し、商品開発に関する知見を持つ専門家を招聘しての連携研究会を開催したので、ここに報告する。

2. 連絡会議及び連携研究会の開催

伊賀焼に関連する団体、商工会・商工会議所、市町、支援機関等の多様な主体と県による連絡会議（表1）を開催して、情報共有を図った。

また、事業者を交えた連携研究会（表1）を開催し、当室による試作品群『アウトドア用陶磁器』の提示提案を実施した。また『低火度磁器素地の製造技術』、『マイクロ波発熱性陶磁器素地の製造技術』等、当研究室保有の研究成果である技術シーズ11テーマを紹介した。

* 窯業研究室伊賀分室

** 窯業研究室

さらに、連携研究会のなかで陶磁器業界紙出版社、坯土メーカーの専門家を講師として招聘し、新商品開発セミナー（図1）を行った。

3. 試作提案及び共同研究の実施

窯業研究室のシーズを具体的に紹介するため、『アウトドア用陶磁器』の試作品（図1）として『低火度磁器素地の製造技術』を活かしたカップ&ボウルを制作し、また研究中の超高耐熱素地製造技術を利用可能なダッジオーブンの機能を持たせたキャセロールを制作した。試作品は連携研究会の場で展示提案した。

研究紹介後、共同研究の要望があった1事業者との共同研究を表2のとおりを実施し、ダッジオーブンの機能を持つキャセロールの試作及びデザイン開発を行った。

4. まとめ

前年度に引き続いて開催した連絡会議は各組織内の異動もあり、伊賀焼産業界支援に初めて携わる担当者もいて有意義であった。伊賀焼産業界支援を実施する関係機関が一堂に会する情報交換の場としては他になく、連携して効果的に支援を考える場としても価値があるため、次年度以降も継続して実施していきたい。

また、当室が保有する技術シーズや研究成果を積極的に紹介する場を今後も設けて共同研究による新商品開発の契機としていきたい。

表 1 連絡会議及び連携研究会の概要

日時	内容	場所	参加者数
●伊賀焼関係連絡会議			
H24.7.11 14:00～	1. 参加機関からの伊賀焼関連事業（取組）紹介 2. 意見交換 3. 施設見学 等	伊賀焼伝統産業会館	8 機関 12 名
●第 1 回伊賀焼連携研究会			
H24.9.14 14:00～	1. 新商品開発セミナー 【テーマ】陶磁器業界における新商品開発について 【講師】株式会社陶業時報社 社長 村井 慶治氏 【内容】現在の消費者動向、地域ブランド、業界の成功事例、商品開発を検討する際の注意事項等の解説 2. 窯業研究室の試作品紹介 【テーマ】アウトドア用陶磁器の提案 【内容】①低火度磁器素地のカップ&ボウル ②ダッジオーブンの機能を持つキャセロール	伊賀市丸柱地区市民センター	16 名
●第 2 回伊賀焼連携研究会			
H24.12.14 14:00～	1. 新商品開発セミナー 【テーマ】新商品開発に対する取り組み 【講師】ヤマカ陶料株式会社 副社長 加藤 誠二氏 【内容】美濃焼の現状、美濃地区の企業紹介、陶磁器リサイクル技術の紹介 2. 窯業研究室の技術シーズ紹介 低火度磁器の製造技術、マイクロ波発熱性陶器の製造技術、伝統的な伊賀焼土鍋素地の製造技術他、全 11 テーマの内容について資料を基に紹介	伊賀市丸柱地区市民センター	21 名

表 2 共同研究の概要

期間	研究課題	共同研究先
H24.10.29～H25.3.29	インドア、アウトドア共用キャセロールの製品化研究とデザイン開発	伊賀焼製造業者



図 1 『アウトドア用陶磁器』の試作品